

第4章 和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査

1 遺跡と層位

発見の経過と昭和51年の調査 瀬戸遺跡は、和歌山県西牟婁郡白浜町瀬戸字臨海にあり、現在は京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所の構内にある。白浜町は観光地として知られるように風光明媚な自然にめぐまれており、遺跡も変化に富んだ海岸線にそって多く分布する。瀬戸遺跡もこうした海岸にある遺跡の一つであり、番所山（標高36・26m）を岬とする砂洲の中ほどに位置し、南と北の両側に海がせまっている。

さて昭和39年構内のほぼ中央に図書館を建てた時、掘削された土の中に遺物がふくまれていることが樫山嘉郎によって注意され、採集された。その時の遺物は、石棒の完形品1点を除いて、ほとんどは土器の小片であった。それらは縄文土器、弥生土器のほか古墳時代後期の須恵器、土師器や青磁、染付などの各種類にわたるものであった。縄文土器は、⁽¹⁾中期の里木Ⅱ式の1点をのぞいて、すべて縄文晩期終末のものであった。船橋式もしくはそれと一連の型式である。弥生前期の畿内第Ⅰ様式の壺形土器の小片も併せて1点採集されており、縄文文化との関連で、注目された。

昭和51年、構内に職員宿舎の新営工事が予定されたので、前記の京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会が設立され、同年秋に試掘調査を行なうこととなり、泉拓良班長の指揮で9月27日から10月13日までの17日間中村友博と清水芳裕が現場を担当した。

テストピットの設定と層位 工事予定地域は構内の東北部でL字形をなす約1000㎡の地域である。このL字形の地域は、さらに直交する2つの地域に分けられる。一つは東北部で職員宿舎の建設予定地。現在は山林で、東北数mのところこの付近に多い珪板岩の露頭がある（図版31-1）。今一つは給排水管の予定地であり、前者から直線的に南に延びる地域。現在は道路敷である（図版31-2）。

以上の2ヶ所の中心線が直交する点を原点（0，0）とし、XYの直交座標を設定し、遺跡地点を表示する方法をとった。そうして、各ピットをX軸上、Y軸上に配することとした。テストピットは予定地の層位を全般的に観察するために、原点に1ヶ所、Y軸に2ヶ所、X軸に2ヶ所の計5ヶ所を設定し、南より順に第1ピット～第5ピットを表示した（第22図）。原点の第3ピットを除いて3×3㎡のピットをX軸の南側、Y軸の西側に設けた。第1ピット～第3ピットによってY軸上のつぎの間の層位観察を試みた。（2.0～0m，-27.0～-30.0m，-55.0～-58.0m）

図22 臨海実験所構内全図

7.0～-30.0m, -55.0～-58.0m) 同様に第3ピット～第5ピットによってX軸上のつぎの間の層位観察を試みた。(0～3.0m, 17.0～20.0m, 48.2～51.2m)

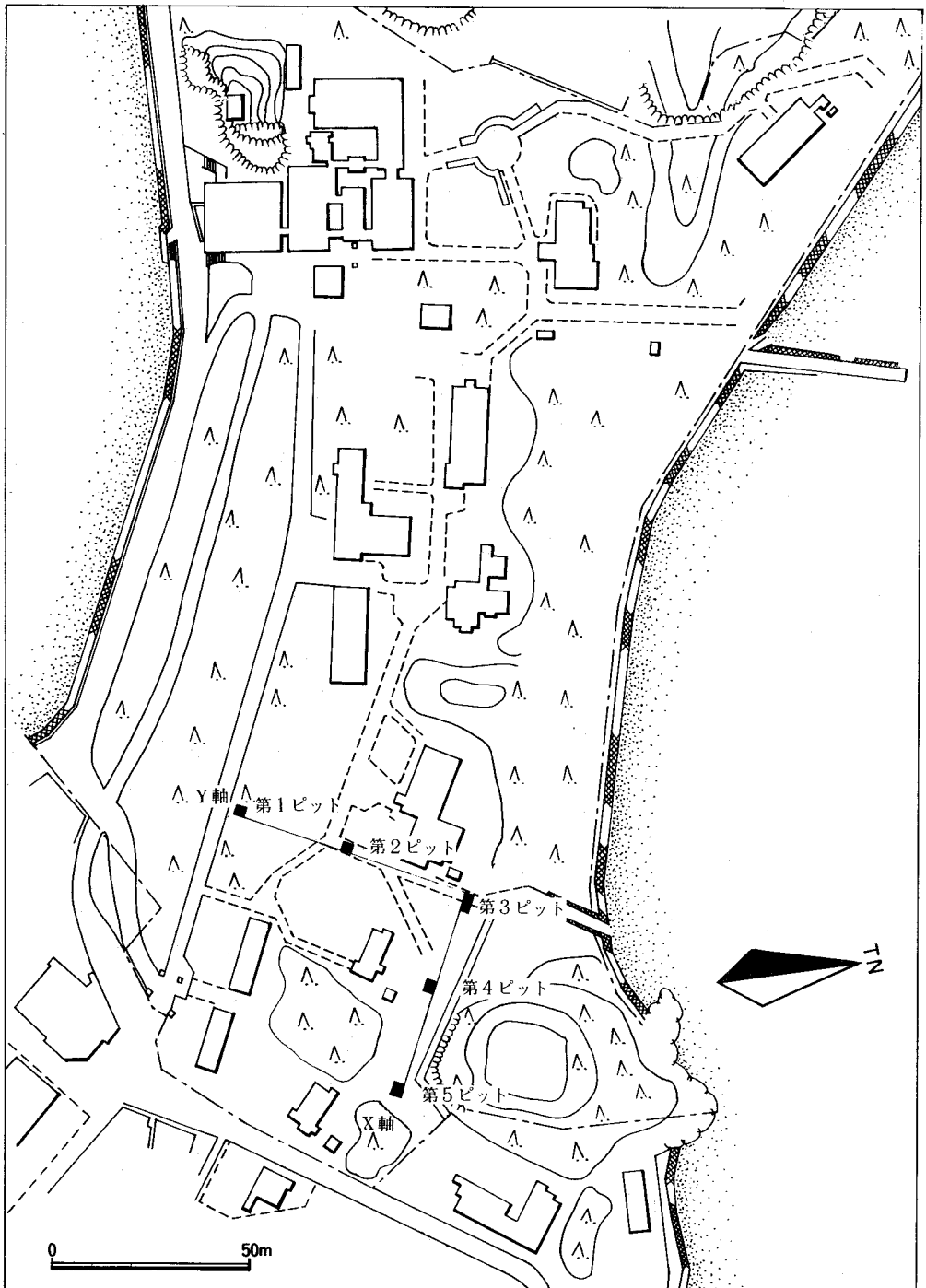
各ピットの設定位置は、ピットの四辺のうち必ず一辺が軸上であること以外は、土地利用の現状を考慮して決定したものである。また、各ピットはノリ面をつけなければならないために下端は上端の3×3mより幾分狭くなっている。今回の標高は、前記の番所山三等三角点(標高31.61m)を使用した。

第1ピット(第23図―1) 地表下2.2mほど掘り下げた段階で8層の堆積を確認した。上より1)表土、2)礫混りの茶褐色砂層、3)黄褐色砂層、4)茶褐色砂層、5)暗褐色砂層、6)黄褐色砂層、7)貝殻の粉末混り白白砂層、8)黄色砂層である。そのうち第7層、第8層はピット南西隅の掘り下げ区によって確めたものである。第3層から土師器と弥生式土器が、第4層から晩期縄文器74点が、第5層からは同じく123点が出土した。第6層以下は遺物が出土しなかった。第5層と第6層の境は凹凸が著しく、その境界は明瞭であるが、他の層の境は明確でなく漸移的である。出土遺物のなかには、第4層と第5層とで接合できるものがあった。

なお、ピットの層位番号は各ピット毎に上より下につけたもので、互に関連する統一呼称ではない。

第2ピット(第23図―2) 地表下2.8mほど掘り下げた段階で10層にわたる堆積を確認した。上より1)表土層、2)礫混り黄色砂層、3)明るい茶褐色細砂層、4)暗い茶褐色細砂層、5)黄色細砂層、6)白色砂層、7)褐色砂層、8)茶褐色砂層、9)暗褐色砂層、10)貝殻の粉末混りの白色砂層である。遺物として第9層より晩期の縄文土器50点が出土した。第5層と第6層の境は凹凸が著しかった。縄文土器の包含層はテストピット中、標高がもっとも低く、層が厚い。包含層の下第10層からは遺物が出土しなかった。

第3ピット(第23図―3, 4) 地表下2.3mほど掘り下げた段階で、7層の堆積を確認した。上より1)表土層、2)黄色砂層、3)礫層、4)黄色砂層、5)暗褐色砂層、6)黄色砂層、7)貝殻の粉末混りの白色砂層である。第2層と第4層の黄色砂は色調や砂質からは区別がつけられないが、第3層の礫を介在することで土層が分けられる。この礫層はピット西北部下で薄くなり、代りに乾燥した黄白色砂層が第2層と第4層の間に介在する。遺物として、第2層から土師器が若干出土したほか、第5層より縄文土器が2点出土した。縄文土器の包含層はテストピット中、もっとも標高が高く、緩やかに東と南に傾斜する。第1ピット、第2ピットに比べて、縄文土器の出土量は著しくない。



第4ピット（第23図—5） 宿舎新営工事の中心部に相当する地点である。地表下2.5mほど掘り下げた段階で、5層の堆積を確認した。上より1)表土層、2)礫混りの黄色砂層、3)茶褐色砂層、4)暗褐色砂層、5)黄色砂層である。第2層と第3層からは須恵器と土師器が出土したが、第4層からは縄文土器片8点が出土した（図版51）。縄文土器の包含層は東に緩やかに傾斜するが、遺物の出方は散漫であり、恐らく遺跡の東北端にあたっているものと思われる。第5層からは出土遺物がなかった。

第5ピット（第23図—6） テストピット中唯一の遺構らしいものが検出された。性格はよく判らないが、溝もしくは池のようなものかも知れない。テストピット西北部で1)表土層、6)黄色砂層の堆積をみた。表土を削った段階で第6層を肩として東南方向へ落ち込む傾斜面を検出した。覆土は土より3)黄色砂層、4)黄色土と黒色土のブロック層、5)板状の石塊を染付の破片が出土したが、第5層からは須恵器（図版51—1 WC03, 04）と土師器しか出土しなかった。このため第5層の上面を露呈して（第24図）、掘り下げを中止した。東南隅に1㎡の拡張を行なったが、出土遺物に関して同様な所見をえた。南壁に沿って、幅50cmほどの小トレンチを設けて土層を詳細に観察した上で、断面図（第23図—6）を作成した。第6層の下には7)暗灰色粘土層がある。第7層の上面で須恵器片1点

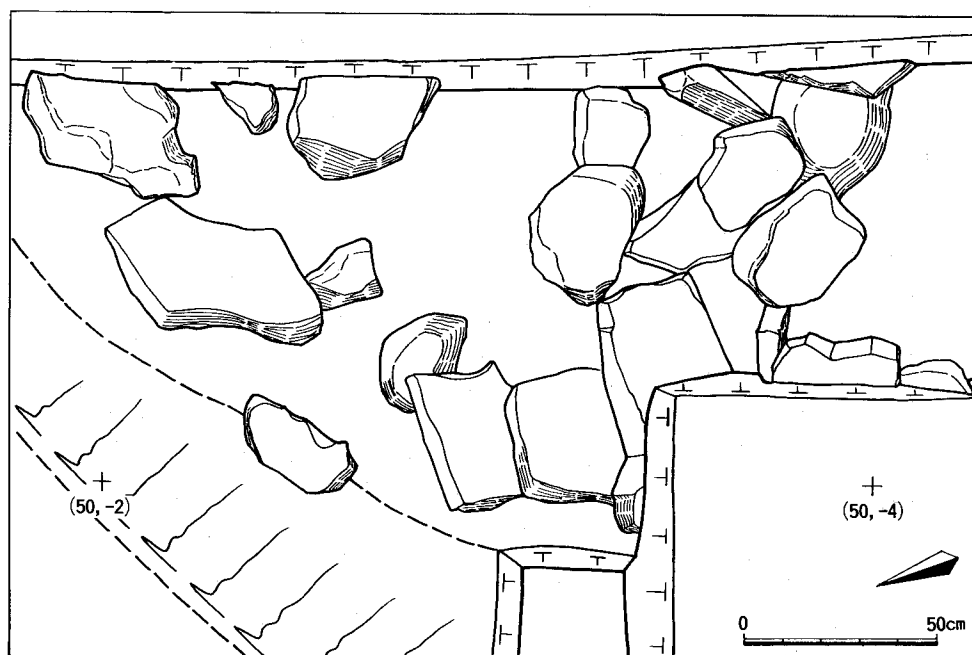
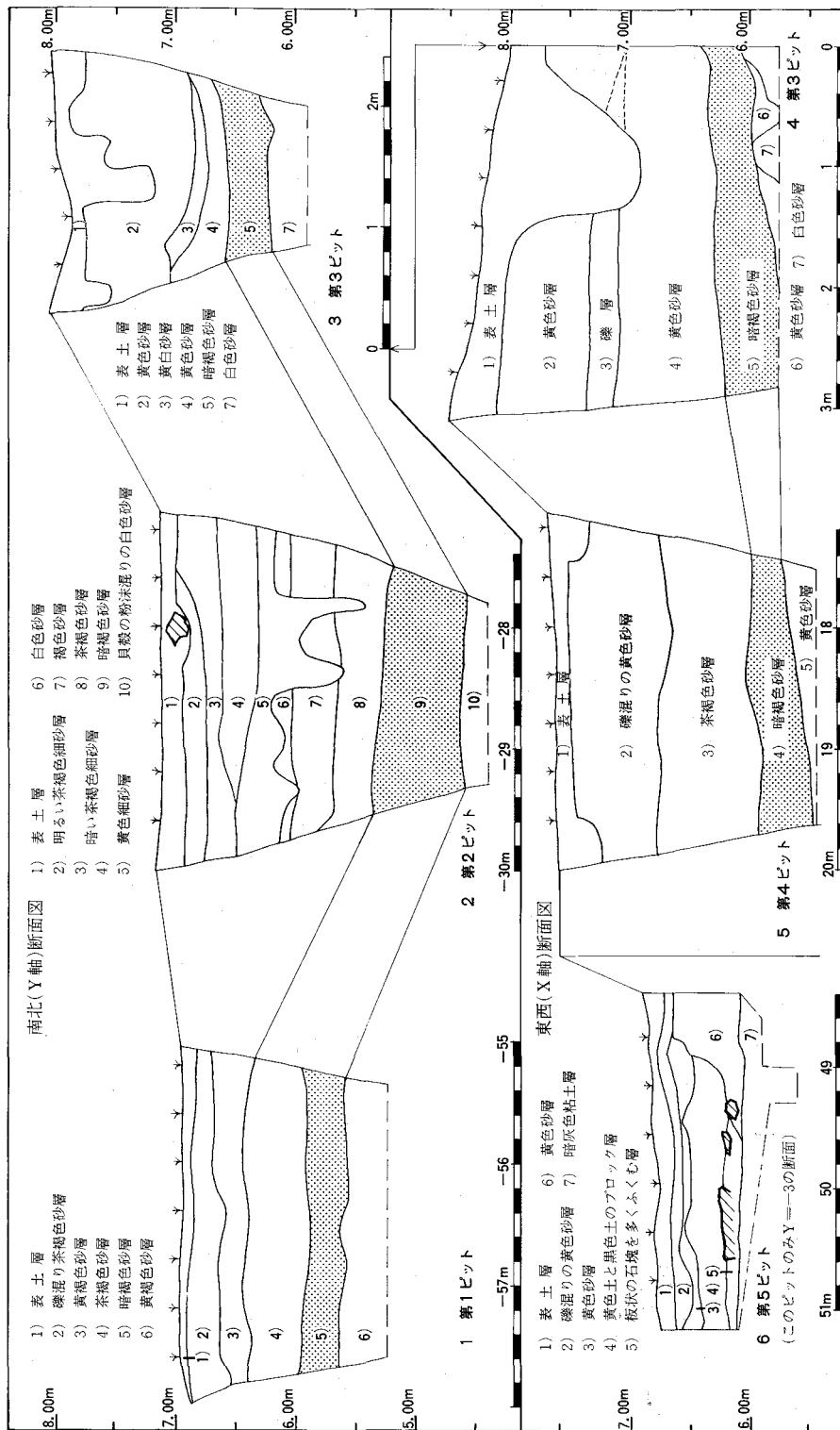


図24 第5ピットの落ち込みにみられる石塊

図23 各テストピットの層位



(図版51—1 WC05)をえた。小片であり型式が判らないが、外面は平行叩きで、内面がナデ調整である点は第5層出土例と同じである。第5ピットの層位の特徴は、表土層から第6層までが、7)粘土層の上にあたかも羊糞を斜めに切ったように堆積することである。西が古く、東が新しい。石塊を含む層の性格を明らかにするためには、このピットをさらに拡張する必要があるので、今回の試掘では、みあわせることとした。

層位のまとめ 瀬戸遺跡では、今回初めて考古学的な試掘によって層位上の所見がえられた。それによれば、縄文晩期の包含層は厚い黄・黄褐色砂層に被覆されて良好に保存されている。縄文晩期の土器を包含する暗褐色砂層は、各地点の^{キー}鍵層となり、同一時期に堆積した可能性が強い。同層には相当に起伏があり、旧地形が現在よりも平坦でなかったことを示す。大勢として東北方向へ緩やかに傾斜し、同時に遺物の出土は散漫になる。第1ピットのみ、これより上層に縄文土器を包含する。このピットでは包含層の堆積過程で他のピットよりも早く有機物の供給がすたれたことを示す。縄文時代の包含層の上には黄色、茶褐色の砂層の厚い堆積がある。この破覆砂層をかなり細分してきたが、遺跡全域を通じては上位にある礫を混えたものと下位にある礫と混えないものとに2大別するのがよいかもしれない。

2 出土遺物

縄文土器 出土した縄文土器はいずれも破片で、総数257点（明らかに同一個体と思われるものは1点と数える）である。そのうち、凸帯など何らかの装飾をもった破片は38点である。型式の組成を知る上では不十分であるが、いずれも縄文晩期の土器であり、次のような破片が認められる。

1 精製の浅鉢形土器 第2ピット第9層より1点採集した(図版51 WJ25)。薄手の黒色磨研土器である。形態は皿状の胴部に山形の口縁が四方に張り出す特異なもので、装飾として口縁の外面には凸帯、内面には沈線を、頸胴部界の稜には刻みを施す。胴部の内面には丹彩が残る。胎土に砂粒は少ない。頸胴部界の稜に刻みを施す浅鉢形土器は、畿内地方にはあまり例をみないものである。

2 刻み目凸帯をもつ並製の土器 壺形と深鉢形とあるが、小片のため区別の難しいものがある。口径から考えて次の2点が壺形土器をなすであろう。WJ01(図版51)は頸部に横位の沈線を散漫に施す。WJ13(図版51)は頸部に縦位の調整痕をみる。原体は、恐らく植物の枝茎をたばねたものであろう。WJ27(図版51)は頸部を丁寧に横ナデする

が、光沢はない。

頸胴部界に稜をもつ深鉢形土器をなすものがある。出土資料のなかではこのタイプが最も多い。口縁下に一条の刻み目凸帯をめぐらすものと口縁下及び頸胴部界に二条の刻み目凸帯をめぐらすものとの2種類がある。しかし、小片のため、2種何れか区別のつかない資料が多い。頸部はナデによる調整痕を残すものとケズリ痕を残すものがあり、前者の方が多い。胴部は下から上へ削って調整する。凸帯に関しては後述する。

3 凸帯をもつ鉢形土器 2 同様凸帯をめぐらす刻み目を施さないものが2点ある。W J 24 (図版33—2) は、恐らく壺形土器の口縁部、W J 07 (図版33—1) は背の低い鉢形土器の頸胴部界であろう。

4 口縁端部に刻み目をもつ粗製の深鉢形土器 第1ピット第5層より1点採集した(図版51 W J 17)。口縁の内外面をナデで調整する。頸部以下は不明。

刻み目凸帯について 刻み目凸帯は口縁にあたる破片が23点、頸部にあたる破片が3点出土した。これらの刻み目凸帯は相当に変化に富むものであるが、今凸帯の貼り付け方、刻み目のつけ方の2点に着目して細分することができる。

凸帯には、凸帯を上下両端から指で押えて貼りつけるもの(○形)と、上方からだけ押えて貼りつけるもの(○形)とがある。両者は断面の形態が明瞭に違い、容易に判別がつく。総じて、上方からのみのもの(○形)が扁平である。磨滅によって判別のつかないものを除けば、形が14点、形が10点であり、両者を併用したものが1点である。○形と○形の比率はほぼ同じである。

一方刻み目のつけ方には次の3種がある(図版35—2)。1へらを斜位に押圧してつくるもの(D形)、2へらをたてて切り込むようにつけるもの(V形)、3原体を凸帯の上でナデ走らせ皿状に凹めてつけるもの(○形)である。以上の3種を出土資料で確かめた。⁽¹⁾このうち○形はD形やV形と明らかに区別がつく。しかし、D形とV形の区別はへらが凸帯にあたる角度によっているのもともと本質的なものではなく、同一の技術を2極的に分類したものである。試みに口縁部の破片だけを取りあげて上記の分類を行なった(第25図)。

D形が過半しめ、ついでV形、○形の順位である。D形では、○形と○形が同じぐらいであり、V形では○形が多く、逆に○形では○形が多い。

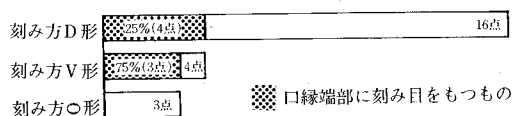
ところで、一般的に扁平な凸帯に刻み目を施す場合は、押圧によるよりもノッチによっ

た方が簡便であろう。V形と○形とはこのような技術の上での関連性があり、恐らくV形に○形の比率が高いのではこの理由によると思われる。さて、これらの資料をもう一つ別の要素を考慮に入れて検討してみよう。刻み目凸帯をもつ土器には口縁の端部に刻み目を施すものとそうでないものがある。そこで、凸帯の刻み目のつけ方3種別に対する、口縁端部に刻み目をもつものの割合をみつめてみよう（第26図）。その結果、V形にD縁端部に刻み目を施すものが多いことが判る。先の貼りつけ方との検討で、V形と○形とは関連することをみたが、V形凸帯と口縁部は装飾位置が違うから、技術的な関連性は一切ない。従ってV形凸帯と口縁部に刻み目を施すことの間には、技術をこえたものがあると思わなければならない。もし、この両者に技術以外の関連性があるとするならば、刻み目凸帯をもつ土器の中で物異な一群を抽出することができる。要するに、瀬戸遺跡の刻み目凸帯をもつ土器の中には、口縁部に刻み目を持ち、ヘラで切り込む様に凸帯に刻み目を入れる

出土地点 突帯の刻み方	第1ピット 第IV層	第1ピット 第V層	第2ピット 第IX層	計
D形	7 ◀形3 △形4	8 ◀形6 △形2	1 ◀形△形 併用1	16 ◀形9 △形6 併用1 (69.6%)
V形	1 ◀形0 △形1	2 ◀形1 △形1	1 ◀形0 △形1	4 ◀形1 △形3 (17.4%)
○形	0	3 ◀形3 △形0	0	3 ◀形3 △形0 (13.0%)
				23 ◀形13 △形9 併用1 (100%)

一群の土器が、特異なものとして存在することになる。しかし、何分にもサンプルの量が少なく、どの程度この推論に信頼がおけるかは未定である。今後、検討を要する課題である。また刻方の○形は伊勢湾地方の「西志賀式第⁽³⁾2類」で流行するところから、その関連が問題となるものである。

第25図 凸帯の刻み方の3種別数量



第26図 凸帯の刻み方3種別に対する

口縁端部に刻み目をもつものの割合
縄文文化の終末の様相を知る上で役立つであろう。

成形痕 成形時の粘土紐の剥離したことを示すものが2点ある。一つは、底部にあたる所（図版35—3 a）、今一つは胴下部にあたる所（図版35—3 b）である。前

以上、この種の土器が小片であるために、従来の凸帯の条数を問題とする⁽⁴⁾方法をとることができなかったので、別の観点から分類と試みてみた。縄文晩期後半の刻目凸帯を、凸帯の貼付け方や刻目のつけ方から分析することは、

者は底部外周に幅0.6cmほどの剥離痕を示す。直径約4.0cmほどの平底の外周に0.6cmほど粘土を環状に貼りつけて底部を拡大したものである。畿内地方の縄文晩期終末の船橋式は、⁽⁵⁾円盤状の最下段にさらに粘土を重ねて、底部を成形することが知られており、本例とは成形法が異なる。畿内地方の縄文晩期の深鉢形土器のなかに、船橋式とは別に底径が著しく小さい丸底風のものがある。⁽⁶⁾和歌山県地方に多いようだが、船橋式より古い橿原式⁽⁷⁾の特徴ともみられている。成形上、本例はむしろこのタイプと関連づける方がよいかも知れない。

今一つの胴下部の例（図版35—3 b）は、粘土紐の継目に沿って剥離したもので、下端の特徴から判断すると、粘土紐の上端が内傾し、通例と違わないものである。⁽⁸⁾器壁の厚ちは、約7mm、剥離面の最大幅は mm、外面部の5mmほどは緩やかなカーブで、それ以下は急カーブをなす。この土器片は、この面の途中で欠損するが、この成形法によるならば胴下部の偽口縁はさらに下にもう一つ緩やかなカーブをもつはずである。成形法の問題に関してはさらに細かく検討する必要がある。

土師器・須恵器 出土した土師器・須恵器は小片のため型式の判るものがすくない。須恵器のうち第5ピットより出土したもの（図版34 WC03～5）には、内面をナデ消したものがあり、恐らく6世紀中葉を下らないものと思われる。第4ピット第2層より出土した破片（図版34 WC02）は、大形壺の胴部に相当すると思われる。年代の推定できる資料に同層出土の坏の身（図版34 WC07）があり、6世紀後半頃と思われる。土師器の磨滅が著しくて、形の特徴がよく判らない。製塩土器が若干ある。（中村）

註

- 1 伊勢田進 「南紀白浜町瀬戸臨海発見の石棒」 『田辺文化財』 10 1966年。
- 2 この他に、棒状具の押圧によって刻目をつけるもの（○形）があり、北部九州地方の縄文晩期の凸帯文土器で流行する。この手法は畿内地方の縄文晩期の凸帯文土器にも同じくみられる。両者の系譜に関しては明らかにされていない。
- 3 紅村弘氏によって伊勢地方の前期弥生土器とされる（紅村弘 1958年 『名古屋市西志賀貝塚』）。
- 4 凸帯を一条めぐらすものが古く、二条めぐらすものが新しいとする考えがある（外山和夫 「西日本における縄文文化終末の時期」 『物質文化』 9 1967年）。この考えは、

ほとんど定説化しつつあるが、畿内地方の縄文晩期終末の船橋式は一条の方が多くである（原口正三、田中琢、田辺昭三、佐原真 『船橋遺跡の遺物研究』 60—63頁 19〇年）。この点、石野博信氏の警鐘はまことに貴重である（「シンポジウム 弥生式文化研究の諸問題」『古代学研究』 61 9頁 1971年 の発言）。船橋式に関しては、むしろ、口縁の端部に刻目をもった土器がたい点に注意をはらうべきであろう。この点から言えば、瀬戸遺跡の口縁端部に刻目をもつ凸帯文土器は船橋式ではなく、それよりも古い様相を示すと言えなくもない。しかし畿内の最終末の縄文土器には、口縁端部に刻目をもつものがあり、船橋式とは別の伝統が一部あるようである（喜谷美宣 『岸遺跡発掘調査報告』 図版10 1961年、田辺昭三ほか 『湖西線関係遺跡調査報告書』 土器番号A276 1973年）。

5 佐原真 「山城における弥生式文化の成立」 『史林』 第50巻第5号 1967年。

6 糸野遺跡の例、巽 三郎・羯磨正信 「和歌山県下の縄文式文化大観」 『古代学研究』 18 1958年。鳴神貝塚の例、石部正志 「鳴神貝塚発掘調査報告」 『和歌山県文化財学術調査報告書』 第三冊 図版16—66 1968年。

7 岡田茂弘 「近畿」 『日本の考古学 II 縄文時代』 206頁 1965年。

8 Stevenson, R.B.K. Prehistoric Pot Building in Prehistoric Europe fig.1 *Man* May, 1953.

謝辞 多くの人の協力で発掘と報告書の作成がなされた。発掘にあたっては、実験所の時岡所長をはじめ田口係長の全面的な協力を賜った。図版は梅川厚子、清水芳裕、深沢芳樹の諸氏が作成にあたって下さった。遺物の写真は上野利明氏（東大阪遺跡保護調査会）の撮影によるものである。また理学部地質学教室の石田史郎先生から堆積学上の助言をえ、土層のサンプルを採集していただいた。考古学教室の小野山節先生は、現場と報告書の作成で助言と指導をして下さった。編集を担当した泉拓良、宇野隆夫の両氏と併せて、これらの諸先生、諸氏に感謝の意を表する次第です。